

資料紹介

同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(四)―

福田 智子・小原 菜々子・関 あかり・薛 堰之

本稿は、同志社大学文化情報学部が所蔵する江戸時代に制作された『百人一首かるた』のうち、歌意絵入りかるた四種について、札の影印を掲載するとともに、翻字と、古注釈を参看した歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。今回は、『百人一首』一七番から二六番までの札を取り上げる。

本稿は、「同志社大学文化情報学部蔵『百人一首かるた』(歌意絵入り)四種―影印・翻字と考察(二)―」(『文化情報学』第十四卷第一号、二〇一八年十一月)、「同―同(二)―」(『同』第十五卷第一号、二〇一九年十月)、「同―同(三)―」(『同』第十五卷第二号、二〇二〇年三月)に引き続き、歌意絵入り『百人一首かるた』四種について、古注釈を参看しながら、歌意絵の図柄に関する比較考察を行うものである。

凡例

一、冒頭に、『百人一首』の歌番号を示す。

一、かるた四種の影印を列挙し、その下に翻刻本文を示す。

一、【字母】では、翻刻の本行本文に即した仮名の字母を示す。漢字や踊り字など、仮名以外の表記には()を付す。

一、【古注釈】では、歌意絵を考察する際の着眼点ごとに、古注釈の本文を引用する。主として島津忠夫氏・上條彰次氏編著『百人一首古注』(和泉書院、一九八二年二月)を参看・引用する。

一、【考察】では、引用した古注釈に依拠しながら、四種のかるたの図柄を比較検討する。

四種のかるたの書誌情報と凡例の詳細は、『文化情報学』第十四卷第一号に譲り、本稿では以下のとおり簡略に記す。

- (1) かるたA 絵変わり百人一首かるた 資料番号：146700558
- (2) かるたB 歌絵百人一首かるた 資料番号：156700025
- (3) かるたC 絵変わり百人一首かるた 資料番号：166700139
- (4) かるたD 歌絵百人一首かるた 資料番号：176700497

[A]



在原業平朝臣
ちはやふる
かみ
よも
さかす
たつたかは

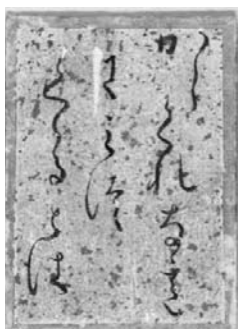


から
くれ
なるに
水
く、
るとは

[B]

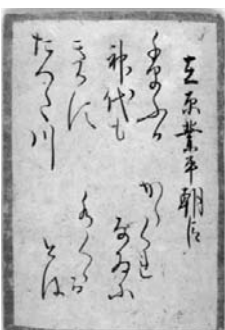


在原業平朝臣
千早振かみ
よもすかす
たつたかは



からくれない
にみつ
くゝるとは

[C]



在原業平朝臣
千早ふる から
神代も くれ
さかす なるに
たつた川 水くゝる
とは



から
くれ
なるに
水
くゝる
とは

[D]



在原業平朝臣
千はやふる
神代も
さかす
たつた川



水くゝる
とは
から
くれ
なるに

【字母】

〔A〕（在原業平朝臣）

知八也不留可三与毛幾可須多川多可八
閑良久連奈井耳（水）久（ゝ）累止波

〔B〕（在原業平朝臣）

千早振加美与毛寸可須太川多加可波
加良久禮奈意仁三徒久（ゝ）留止波

〔C〕（在原業平朝臣）

（千早）不留（神代）毛幾可須太川多（川）
加良久連奈為尔（水）久（ゝ）留止波
加良久礼奈為尔（水）久（ゝ）留止波

〔D〕（在原業平朝臣）

（千）者也婦留（神代）毛幾可須堂川多（川）
可良久連奈井尔（水）久（ゝ）留止八

【古注釈】

一、「水潜る」説（一）紅葉の下を水が流れる

○『経厚抄』

水くゞるとは、満山の紅葉の下を行水の跡をいへば、くゞると云專用也。

○『宗祇抄』

……龍田川の水もなきまで散しきたる木葉に、水はたゞ紅をくゞりたる様なる興を、（……以下略）。

○『古注』

もみちのしたを水のくゞりてながるゝを見て、（……以下略）。

○『色紙和歌』

たつた川のもちからくれなひにして水くゞり行けいき、錦をさらすごとく也。

○『三奥抄』

是は、立田川に紅葉のみちてながるゝさま、ひとへにから錦をながせるがごとくにして、錦の中より水のくゞるとみゆるを奇異のごとく見る故、神の世までをたくらべていふなり。

二、「水潜る」説（二）水が紅になって流れる

○『師説抄』

此歌、木の葉のから紅を水がくゞるといふと、水がから紅になりてくゞるといふは二説也。但水が紅になりてくゞるといふが師説、秘する也。子細は、神代もきかずといふにつけて、水の紅になりてくゞるといふ奇妙なれば、神代もきかずといふ処によくかなへり也。

三、「水潜る」説（二）の否定

○『雑談』

頃日さる者の講尺に、水が紅になりてくゞるときが秘説也、といへり。左様にきゝてはくゞりものなし。替りていはんとての事にて、あらぬ事をいふと申侍るは、かやうの事にて待る。

四、「水括る」（紅葉が水を括り染めにする）説。

○『新抄』

……その神代にも立田川の水を紅しほりにするといふ事はきゝも及ばぬ事ぞと也。紅葉のむらむらに流るゝを纈纈にいひなしたる也。

○『宇比麻奈備』

紅葉のむらむら流るゝかたにて、白波もひまひま立まじりつゝ、見ゆらんを、紅のゆはだと見なして、最めづらしければ、行水を纈纈（ユハタ）へク、リヅメ）にする事よ、（……中略……）。是は或家の古き説に此くゝるは泳にはあらで紋也とあるによれり。凡纈纈は令式などにも見えて、絹を糸もて処処くくりて、紅紫緑などに染る也。今いふしほり染に同じ。（中略）然るを或説には、絞といふは聞よからずとて泳也といへど、紅に水くゝるといふべき理り明らかならず。

○『異見』

ながるゝ水をしも、かくゆはた染にくゝりなすは、奇異のわざのみありしといふ、神世にも、さるためしいまだ聞ず。こはいかでかと興じたる也。（……中略……）。初学云、ある家の古き説に、此くゝるは泳にはあらで紋也とあるによれり。凡纈纈は、令式などにも見えて、絹を糸もて処々くゝりて紅紫緑などに染る也。今云しほり染に同じ。古今六帖の霜の部に、木の葉みなから紅にくゝるとて霜のあやにもおきまさるかなとよめる、即是也。在原友于の、時雨にはたつたの川もそめにけりから紅に木葉くゝれば、是も上に染にけりといひたれば、くゝり染にとりなせしもの也。かゝれば、ゆはたの事ならで何ならんといへり。此古説尤是也。（中略）初学に、紅葉のむらむら流るるかたにて、白波もひまひま立交りつゝ、見ゆらんを、紅のゆはたと見なせり、といへるは非也。すべて屏風の画などは、其ゑがけるまゝをありがまゝによみ出て、なかなか実景実物をばかへり見ざるぞ、古へ人の真心なる。まづ此画のさまを思ふに、いとも青くかき流したらん水の上に、いと大きやかなるもみぢ

葉の、しかもこき紅なるが、あかあかとしたゝかに呼びたるなるべし。古代の画のさま思ひやるべし。其一葉々々を、ゆはたのかたに見なしたる也。

五、「神代もきかず」は、二条の後への褒め言葉

○『幽斎抄』

東宮の母女御をほめていへる也。

○『師説抄』

下心に、二条の後のさかへをほめて神代もきかずと、屏風の絵によそへていへるなり。

【考察】

『古今和歌集』巻第五、秋歌下、二九四番に「二条の後の春宮のみやす所と申しける時に、御屏風にたつた河にもみぢながれたるかたをかけりけるを題にてよめる」という詞書で載る歌である。二条の後、藤原高子が、「春宮」（皇太子。ここでは、後の陽成天皇）の母の御息所と呼ばれていた時の屏風の絵を題にして詠んだ歌という。

「A」の挿絵の右方手前には、男女二人の人物が描かれる。このうち垂纓（すいゑい）冠を被った衣冠姿の男性が作者の業平であるとすると、女性の方は二条の後、高子であろう。また、画面奥からの大きな流れは、竜田川と見られる。画面左上には木があり、その紅葉の葉が川面に浮かび流れている。実際に二人が竜田川の紅葉を眼前にしたといった構図である。「A」のかかるたの挿絵には、一貫して作者の姿が描かれているが、作者の業平に加え、『古今集』の詞書にその名が登場する二条の后を、『伊勢物語』第六段「芥川」の場面——男が「えうまじまりける」女をさらつ

て逃げる場面——さながらに描いたと思しい。一方、「C」は、川面の紅葉を屏風絵として描く。『古今集』の詞書をそのまま絵画化したことになるう。そして、「B」「D」の図柄は、川面を流れていく紅葉を描くという点で共通する。

「水くくる」の解釈として、現代の多くの注釈書に採用されている「水括る」という説は、『新抄』『比麻奈備』『異見』に見られるものの、古注釈では「水潜る」説が多く見受けられる。中でも、（一）紅葉の下を水が流れるという説が主流と見られるが、（二）水が紅になって流れるという説もわずかながら見受けられる。もともと後者は、『雑談』によって否定されている。

なお、『幽斎抄』『師説抄』が、「神代もきかず」を、二条の後への褒め言葉と見るのは、『古今集』の詞書に二条の后が登場する点に着目した上での見解であろう。

一八番

〔A〕



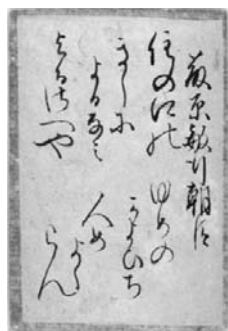
藤原敏行朝臣
すみの江の
きし
に
よるよる
さへや なみ
よく
ゆめ らむ
の
かよひち
人め

〔B〕



藤原敏行朝臣
すみのえの
きしによる
なみよる
さへや
ゆめの くら
む
かよひ
人めよ ち

〔C〕



藤原敏行朝臣
住の江の
きしに
よるなみ
よるさへや
ゆめの
かよひち
人め
よく
らん

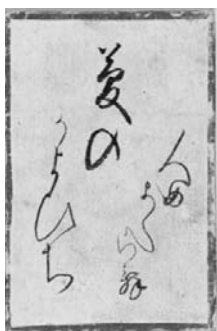


夢の
かよひち
人め
よく
らん

〔D〕



藤原敏行朝臣
住のえの
岸に
よる
なみ
よるさへや



人め
よく
らむ
夢の
かよひち

【字母】

〔A〕（藤原敏行朝臣）

春美能（江）乃 幾之耳与流奈三 与留左部也

由女能可与比知 （人） 女与久良無

〔B〕（藤原敏行朝臣）

春美乃衣能 支之尔与留那美 与留斜部也

由女能加与比知 （人） 女与久良武

〔C〕（藤原敏行朝臣）

（住） 乃（江）能 幾之尔与留奈三 与留佐部也

由女乃可与比知 （人） 女与久良无

（夢） 乃可与比知 （人） 女与久良无

〔D〕（藤原敏行朝臣）

（住） 乃衣能 （岸） 尔与留奈三 与留佐衣也

（夢） 乃可与比知 （人） 女与久良舞

【古注釈】

一、波音が高くて寝られず夢を見ることができない

○『米沢抄小書』

夢にさへ人めのそきよくるごとく、岸による波にさはがれて夢も見ずと也。

二、波は穏やかでも寝られず夢を見ることができない

○『幽斎抄』

高岸にこそ浪のうちたらば夢もさむべき事なれ、是は南海也。殊に住のえのきしはあらき波もよせぬ所なるに、それさへ、しかも夢の

通路をよくるやうなるは、わが恋路の契のうとき故に時々心のおどろくぞと也。

○『師説抄』

住の江の岸にうつ波はあらあらしからぬ^{（マ）}ど、我心のおもひより夢もみぬと也。

○『雑談』

住の江は岸もたいらに遠あさの入海なれば、波もしづかなり。（……中略……）。高き岸はうつ波もあらくして夢もさめん事なるに、入海しづかなる住の江の波さへ通路のさまたげとなるなどといふは、さのみくるしからざる事なれ共、人丸の足引の歌の山鳥を、峰を隔て雌雄ふすをいへりなどいふ類也。

○『鈔聞書』

波の音には夢のさむるもの也。然ども住の江の波はあらくもあらねばさむまじき事なれども、（……中略……）。波のゆるき所にてさへさむるよしなり。

三、「住の江」は松の名所

○『異見』

いづくはあれど、住のえは松のしづえによる波のけしきある所にて、古歌にもいひなれ、人も見しれるをもて、ことにもとり出たる也。

【考察】

『古今和歌集』巻第十二、恋歌二、五五九番に「寛平御時きさいの宮の歌合のうた」という詞書で載る歌である。

「A」の画面右側に描かれる二人の人物は、作者である敏行とその従者であろう。烏帽子を被った敏行が、太刀を担いだ小姓を従えている。敏行が右手を目の位置に挙げているのは、人目がないかどうか確認している仕草であろう。現代の注釈書では、「人目よ（避）くらん」の主語を恋人の男性と見て、女性の立場で詠んだ歌と解するのが一般的であるが、この図柄だと、作者の敏行が、「人目」を「よ（避）く」自分の心情をいぶかった歌という解釈を促すことになりそうである。

さて、画面左側には、入江に橋が架かり、橋の向こうにも手前にも、岸には松が描かれる。橋の手前に鳥居を描くことにより、住吉大社を象徴的に示し、そこが住の江であることを表している。松は、『異見』も指摘するように、景勝地である住の江の景物として代表的なものである。入江の内に描かれる曲線が波だとすると、『米沢抄小書』に言う波音の高さを表すものか。なお、波は穏やかだと捉える古注釈には、『幽斎抄』『師説抄』『雑談』『鈔聞書』がある。

「B」「C」「D」も、それぞれ筆触は異なるが、反橋と、緑色の松らしい木々が描かれる。そして、「B」がその周囲を薄い青で、また「C」が、手前の反橋・松と左奥の松の間を濃い青で描くのは、住の江であろう。なお、「D」は、「A」「B」「C」とは異なり、画面全体に松を描き、中央付近に反橋を置いた図柄であり、住吉大社の境内を俯瞰した構図になっている。

[A]



伊勢
なにはかた
みしかき
あしの
ふしの
まも



あはて
このよを
過して
よとや

[B]

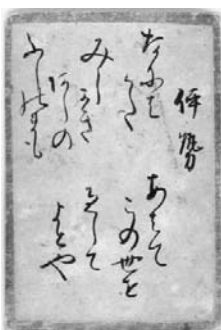


伊勢
なにはかた
みしかき
あしのふしも
まも

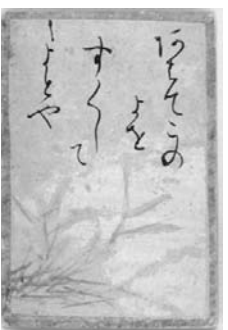


あはて
この
よよを
とすくし
やて

[C]



伊勢
なには
かた
みしかき
あしの
ふしのまも
あはて
この世を
過して
よとや



あはてこの
よを
すくし
て
よとや

[D]



伊勢
難波かた
みし
かき
あしの
ふしの
まも



過してよ
とや
あはて
このよを

【字母】

〔A〕（伊勢）

奈仁者可多 美之可幾安之乃 不之能万毛
安八帝己乃与遠 （過） 之天与止也

〔B〕（伊勢）

奈尔波可多 三之加幾安之乃 不之毛万毛
安者天己乃与乎 須久之帝与止也

〔C〕（伊勢）

奈尔者可多 美之可幾阿之乃 不之能末毛
安者天己乃（世）遠 （過） 之天与止也
阿者天己乃与遠 寸久之天与止也

〔D〕（伊勢）

（難波）可多 三之可支安之乃 婦之能満毛
安八天己乃与越 （過） 之天与止也

【古注釈】

一、「難波渴」について

○『宗祇抄』

此難波がたとは大やうにいひ出たる五文字也。

○『雑談』

君の五字といふは、此難波渴と置たる如く大やうに云て、下の四句のやくにたつ五文字を、君の五文字といひ、（……以下略）。

二、「みじかき蘆のふしの間」の解釈

○『経厚抄』

みじかき蘆のふしまとは、此世の幾クならぬと云心を含たる也。節のまとは両節間也。

○『幽斎抄』

みじかきあしの節の間は、いさゝかばかりもと云也。当意の心也。

○『師説抄』

みじかき芦のつのごむ時分のことをいふ也。その時はふしのまいよいよみじかき也。

○『雑談』

はつかばかりのまもあはぬといはんため、難波渴みじかき蘆のふしの間といへり。蘆は難波によむ事也。節と節とのあいだみじかきもの也。みじかきといふは、わづかばかりの事也。

○『宇比麻奈備』

短き蘆のふしの間のごときしばばかりの逢こともなきは、（……中略……）。みじかき蘆とは万葉に、夏野行男鹿の角の束の間も、或は、なびく玉ものふしの間もとよめるなどよりいで、あしの節の間の有が中に短きを設け出たり。そを此歌には、しばらくの間の意にとれり。

【考察】

『新古今和歌集』巻第十一、恋歌一、一〇四九番に「題しらず」として載る歌である。

〔A〕には、斜め上を眺める女性の姿が描かれる。視線の先には、手前に緑色の長細い葉の植物の群生が広がり、その奥には波模様が重なる。作者の伊勢が、水辺の葦とその向こうの難波渴の方を向いて、恋人

に想いを馳せる様子を表現しているのだろう。

一方、「B」「C」「D」に共通して描かれるのは、主として葦である。これに加えて、「D」のかかるたは、水辺を青色で描き、難波潟を表している。

なお、「B」の上旬札には、作者名の上下に、女性歌人を示す印がある。初句「難波潟」について言及するのは、『宗祇抄』『雑談』で、この「大やうにいひ出たる五文字」（宗祇抄）を、「君の五字」（雑談）と称する。初句で、空間的な広がりのある情景を設定する。

そして、視点は「葦」の「節の間」に移る。いずれの古注釈も、「此世の幾くならぬ」（経厚抄）、「いさ、かばかりも」（幽斎抄）、「はつかばかりのまも」（雑談）、「しばしばかりの」（宇比麻奈備）、「というように、葦の節と節の間が短いことを指摘しているが、『師説抄』は、節の間が「いよいよみじかき」時として、とくに「みじかき芦のつのぐむ時分」を指摘している。一方、『雑談』は、「蘆は難波によむ」ものであり、「節と節とのあいだみじかきもの」とであると規定する。『宇比麻奈備』が、「あしの節の間の有が中に短きを設け出たり。」というのは、葦の節の間が特に短いものを指すという解釈である。いずれにせよ、「B」の葦が、茎の途中で屈曲しているのは、葦の「節」を表現しようとしたものであるろう。

二〇番

[A]



元良親王
わひぬれは
いまはた
おなし
なにはなる



身を
つくし
ても
あはんとそ
思ふ

[B]



元良親王
わひぬれは
いまはたおなし
なにはなる



みを
つくし
ても
あは
むとそ
おもふ

〔C〕



元良親王
わひぬれば 身を
今はた 尽しても
おなし あはん
なにはなる とそ
おもふ



身をつく
しても
あはん
とそ
おもふ

〔D〕



元良親王
侘ぬれば
いまはた
おなし
難波
なる



身をつくし
ても
あはんとそ
思ふ

【字母】

〔A〕（元良親王）

安末川（風） 王比奴連八 以万八多於奈之 奈仁者奈留

（身）遠徒久之天毛 安八无止曾（思）不

〔B〕（元良親王）

和飛奴札者 以末波多於那之 奈仁者奈留

三越川久之天裳 安波武止曾於毛不

〔C〕（元良親王）

王比奴連八（今）者多 於奈之奈尔者奈留

（身）遠（尽）之天毛 阿者无止曾於毛不

（身）遠徒久之天毛 阿者无止曾於毛不

〔D〕（元良親王）

（侘）奴礼八 以万者多於奈之（難波）奈留

（身）遠津久之天毛 安八无止曾（思）不

【古注釈】

一、「事いできて」の解釈（一）宇多天皇が京極御息所を横取り

○『経厚抄』

こと出来てとは、京極の御息所を寛平法皇のよこどらせ給へることを云。（此事古来風林抄にあり）此事故、元良親王の御息所への密通不叶也。其後思侘て此歌を御息所へつかはせる也。

二、「事いできて」の解釈（二）作者と京極御息所の密通

○『三奥抄』

うたの心、わびぬればと云は密事顕れてはいかゞせんと侘たれば、

猶こと出来ぬ先にわが心かはらずしていかにしてか今も君に相んと
のみ思ふと云心也。

三、「事いできて」の解釈（三）作者と京極御息所の密通露見

○『新抄』

事顕れてかやうにあはれぬやうになりてなげきわびてゐて、今では
生てをるかひもなく、死ンだも同じやうにうき事なれば、此うへ人
にとがめられて身をなくしてもあはんと也。

○『拾穂抄』

歌心は、かく顕れて人にもとやかくもてさはがるれば、我も随分忍
びて思ひ絶んとすれど、忍びわびぬれば、（……以下略）。

○『改観抄』

侘ぬればとは、とかくいひさはがれてわびはてぬればとなり。

○『宇比麻奈備』

あらはれてよりせんすべなき物思ひにわびたる時思ふに、（……以
下略）。

四、「今はたおなじ」の解釈（二）「身を尽くす」のは同じ

○『経厚抄』

一首の心、侘ぬればとは、今密通も不叶して侘る心也。今はた同じ
身をつくしてなり共、一度前のごとくあひ度と云心也。

○『新抄』

かやうに恋侘て思ひ死にして死ぬるも事顕れて命をうしなふも同じ
死る命なれば、身をなきものにしても逢ばやと思、とよめるにもあ
るべし。

○『米沢抄小書』

身をつくしいかやうにしても逢たきと也。恋にはや事きはまりたる
心也。

○『改観抄』

同じとは下の句の身を尽すに同じとなり。（……中略……）。只濔標
によせてみをつくしてもといはむために難波なるとはおかれた也。
（……中略……）、今一たびもあはんと思ふと打ふて、よみたまへる
也。

○『宇比麻奈備』

あらはれてよりせんすべなき物思ひにわびたる時思ふに、既（ステ
二）かく成行ては、ことなしぶとも、今果して同じ事ぞ、よしや身
はほろぶとも尚かたらはんと思ひなりぬるとなり。窮してえせご、
ろの出来たる也。

○『異見』

かく、しひても思ひたえて侘のみをれば、いまはた事有し物思ひの
くるしさにおなじ。かく、同じつらさならんには、なほ身を捨てだ
に逢んと思ひ成ぬるといへる也。

五、「今はたおなじ」の解釈（二）「立つ名」は同じ

○『宗祇抄』

されば今又あはず共、立にし名は同名にこそあれ。身をつくしとは
難波のえむ也。

○『天理本聞書』

歌の心は、侘ぬればとは恋わびぬる上に又かゝる憂名の立ぬれば、
とてもかくても其名はのこるまじ、身をつくしつくすとも今一たび
逢ばやといふ心也。

○『師説抄』

又今はあわずとも、共にたちにし名はおなじ名にこそあれ。まへかたはしのびてあはんと思ふにあらわるれば、いまは名にたちてもあわんとぞ思ふと也。

○『拾穂抄』

我も随分忍びて思ひ絶んとすれど、忍びわびぬれば、よしや今あふて二たび名をたつとも又おなじ名なるべければ、（……以下略）。

○『雑談』

歌の心は、今あはでをととも、立にし名は同じ事なれば、身をつくしてもあはんといへり。うちふてたるこゝろ也。

【考察】

『後撰和歌集』恋五、九六〇番に「事いできてのちに、京極御息所につかはしける」という詞書で載る歌である。

「A」は、邸の中にいる女性と、庭先にいる男性が、目を見合わせているという図柄である、女性の方は座っており、男性はそちらの方を振り返っている。男性は作者の元良親王（陽成天皇第一皇子）、女性は、『後撰集』の詞書に拠ると、京極御息所（宇多天皇女御、藤原褒子）であろう。

また、同じく『後撰集』の詞書にある、「事いできて」の解釈としては、（一）宇多天皇が京極御息所を横取りしたという指摘（経厚抄）もわずかに見受けられるが、（二）作者（元良親王）と京極御息所の密通そのものとする『三奥抄』の他は、（三）作者と京極御息所の密通露見と解する古注釈が多い（新抄・拾穂抄・改観抄・宇比麻奈備）。なお、『異見』は、「改観」「初学」の名を挙げて（三）の密通露見説を否定している。

これらの解釈のうち、（二）の密通そのものと解せば、「A」の図柄は、後朝の場面のようにも受け取れよう。作者が、この歌を京極御息所に詠み掛けているといった構図である。仮に（三）の密通露見の後と捉えると、両者が直接まみえるのは難しかろう。

さて、「B」「D」には、水の流れの中に立つ杭が複数本描かれる。「身を尽くし」との掛詞として用いられている「滯標」（航路を示すための標識）であろう。「B」の流れは直線的だが、「D」の水脈は激しく曲がりくねっている。

「滯標」（身を尽くし）は、「今はたおなじ」の「おなじ」とはなにを指すかといった解釈にも関わる語である。すなわち、「身を尽くす」のは同じとする説には、『経厚抄』『新抄』『米沢抄小書』『改観抄』『宇比麻奈備』『異見』がある。一方、「立つ名」は同じとするものには、『宗祇抄』『天理本聞書』『師説抄』『拾穂抄』『雑談』があり、主要な解釈は二通りあるようである。

以上の「A」「B」「D」のかるたの図柄とは全く異なる発想で描かれているのが、「C」である。「C」には、蓑と笠が描かれている。いわゆる「宝尽くし」の図案にもなっている、隠れ蓑と隠れ笠であろう。これらの蓑や笠で姿を隠してでも京極御息所に逢いに行きたいという作者の心情を、象徴的に表していると考えられる。この図柄の根底には、「かくれみのかくれがさをもえてしがなきたりと人にしられざるべく」（拾遺集・卷第十八・雑賀・一一九二・平公誠・しのびたる人のもとにつかはしける）という歌の発想があるだろう。

[A]



素性法師
いまこんと
いひし
はかりに
なかつきの

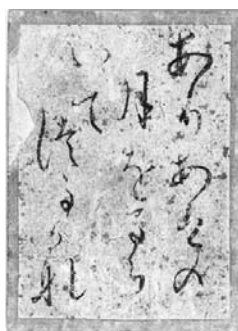


ありあけの
月を
まち
出つる
かな

[B]

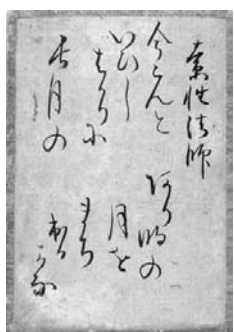


素性法師
いまこむと
いひしは
かりに
なかつきの



ありあけの
月をまち
いて
つるかな

[C]

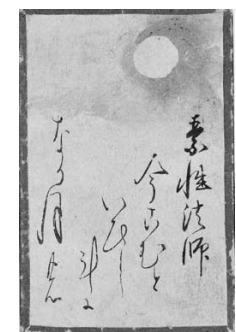


素性法師
今こんと
あり明の
いひし
はかりに
長月の
出るかな

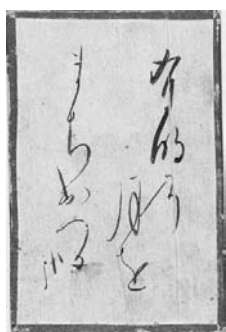


有明の
月を
まち
出つる
かな

[D]



素性法師
今こむと
いひし
斗に
なか月の



有明の
月を
まち出つる
哉

【字母】

〔A〕（素性法師）

以万已无止 以比之八可利耳 奈可川幾乃
阿利安遣能（月）遠 未知（出）川留可那

〔B〕（素性法師）

以万已武止 以比之者可利仁 奈可徒支能
安利安介乃（月）遠 万知以天徒留可那

〔C〕（素性法師）

（今）己无止 以比之者可利尔（長月）乃
阿利（明）乃（月）遠 未知（出）留可奈
（有明）乃（月）越 未知（出）川留可那

〔D〕（素性法師）

（今）古武止 以比之（斗）尔 奈可（月）農
（有明）乃（月）遠未知（出）川留（哉）

【古注釈】

一、「有明の月」について。

○『経厚抄』

……折節長月の比、在明の月の細く成迄、夜毎に待明しつと云也。

○『三奥抄』

有明の月は十五日より後をいへど、かやうに待心をそへよめるは
廿日より以後の月なり。

○『師説抄』

有明は中五夜よりすへといへども、二十日より後曉方に出てあけは

なる、まで月の残りたるをいふ也。

二、女性が男性の訪れを待った期間

○『経厚抄』

……折節長月の比、在明の月の細く成迄、夜毎に待明しつと云也。

○『宗祇抄』

在明の月を待いつる心、一夜の儀にあらず。たのめて月々を送り行
に、時しも長月の空に成行心を、よく思入てあぢはふべき歌也。

○『米沢本小書』

定家顕注密勘と云本に、月のはじめの比あひたる人いまかへりこむ
といひしが、有明の比までこぬよし也。

○『天理本聞書』

今こんとは三の心あり。たとえば初秋の三ヶ月の比など馳こんと契
し人の、九月の有明の比までこぬを、夜な夜な待いでつるかなと
也。又只夕月夜の比より有明までと也。又春夏比より長月までと也。
いづれも無相違。

○『色紙和歌』

おもふ人のわかれし時、又やがてこんとさだめたりしを、けふかけ
ふかとまちくらし、初秋よりはやなが月のすゑまでつるにきたらず
して、まち^{（マ）}ざるあり明の月は出きたれりとかこつ心也。

○『幽斎抄』

有明の月をまち出つる哉と云を、顕昭は一夜の事といへり。定家卿
の心は各別也。月のいく夜をかかさねしと、初秋の時分よりはや秋
もくれ月も有明に成たると也。他流当流のかはりめ也。（中略）定
家卿の顕昭は歌を浅く見る者とあり云々。つる哉と云に、月日をへ

たる心みえたり。

○『師説抄』

さて歌の心は、いまこんといひしほどに頼めて月日を送り、まちまちであれば、秋さへ長月の空も更てあり明の月も一夜二夜になれども、待人はこで唯有明の月を待出である哉、とおどろきてよめる歌也。六条家には一夜といへる也。顕昭ならば今夜の義をすてず見られたり。

○『後陽成抄』

今こんこんといふほどに、まことかと思ひて月のはじめから月のすゑまで待つほどに、おのづから有明の頃になるまで待つゆゑ、有明の月をまちをりたるぞとなり。冷泉家にはただ長月の有明まで待ちたる也。月末までの事也。顕昭は一夜と意得。

○『三奥抄』

此うたを、ひと夜のことにあらず秋のはじめ比より長月迄かけて待ける心也、といふ説亦わろし。たゞ今夜と頼めたる一夜のことにして感慨はあくまで有べし。

○『改観抄』

古今の部立を見るに、此歌の前後は只待恋の歌なり。久待恋・久待不_レ来恋などいふ題に叶ふべき歌は、恋五に僧正遍昭の、わが宿は道もなきまであれにけりといふ歌、次に今こんといひて別し朝よりといふ歌より十余首あり。そこにいらぬにて一夜の事なること知べし。

○『要解』

此歌を、一夜の事にあらずたのめて月日送りゆく事とみるは、わろ

し。古今集の歌のついでにてしらる。

《参考》『顕注密勘』

今こむといひし人を月比待程に、秋も暮、月さへ有明に成ぬるとぞよみ付けむ。こよひばかりは、猶心づくしならずや。

【考察】

『古今和歌集』巻第十四、恋歌四、六九一番に「題しらず」という詞書で載る歌である。

「A」では、邸内を俯瞰した構図の中央に、僧綱襟を立てた法服を着た人物が描かれ、視線は画面左上の丸い月に注がれている。この歌は、女性の立場で詠まれているが、図柄には、作者の素性法師が描かれていることになろう。

邸と丸い月を描くのは「C」で、画面右上には月、左下に寄せて邸の屋根がある。また「D」は、画面右上に丸い月のみを描いている。

以上のかかるたは、いずれも丸い月を描く。「有明の月」を表すのであろうが、「有明の月」は、夜明け近くになっても空に残っている、陰暦十六日以後の月であり、実際には丸い月（満月）ではない。古注釈にも、「在明の月の細く成迄」（経厚抄）といった記述や、二十日より後の月（三奥抄・師説抄）との指摘も見られるが、図柄としての「有明の月」は、丸く描かれることでイメージが定着しているようである。

さて、「A」「C」「D」のかかるたが月を描く一方で、「B」は月を描かない。画面右端にある赤い丸印は、月ではなく、「B」のかかるたに一貫して付されている僧の札を示す印と見られる。そして、描かれているのは、画面左の雪洞と、その右側の盆に載せた皿と猪口のようなものであ

る。男性の訪れを待つ女性側の用意であろうか。具体的な物を描くことで、その状況を象徴的に表そうとしているようである。

さて、女性が男性の訪れを待った期間については、『顕注密勘』で定家が「月比」説を示してから、『宗祇抄』『師説抄』などが継承する。『色紙和歌』『幽斎抄』はとくに、秋の三ヶ月と明記する。また、『経厚抄』『米沢本小書』『後陽成抄』は、長月の一ヶ月と解する。『天理本聞書』は、秋の三ヶ月、春夏から長月にかけて、あるいは、長月の一ヶ月といった説を並記し、「いづれも無相違」と述べる。一方、「一夜」説は、顕昭の説として古注釈の随所に言及があるが、この説を採るのは、『三奥抄』『改観抄』『要解』である。中でも『改観抄』『要解』は、その根拠として『古今集』の配列に着目している点が実証的である。

二二番

〔A〕

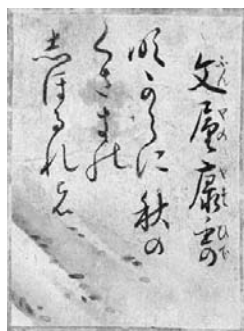


文屋康秀
しほる
れは
ふくからに
秋の
くさきの

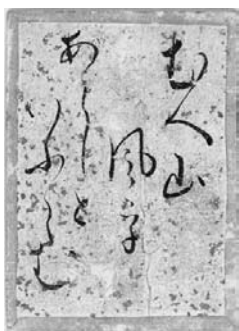


むへ
山風を
あらしと
いふらん

〔B〕

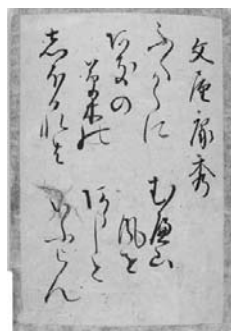


文屋康秀
吹からに
秋の
くさきの
しほるれは



むへ山
風を
あらしと
いふらむ

〔C〕

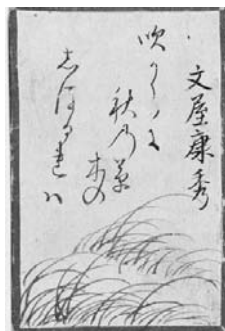


文屋康秀
ふくからに むへ山
あきの 風を
草木の あらしと
しほるれは いふらん



むへ山
かせを
あらしと
いふらん

〔D〕



文屋康秀
吹からに
秋の草
しほるれは 木の



あらしと
いふらん
むへ山風を

【字母】

〔A〕(文屋康秀)

不久可良仁 (秋) 乃久左幾乃 之本累連八

武部 (山風) 遠 安良之止以不良无

〔B〕(文屋康秀)

(吹) 可良仁 (秋) 乃久左支能 志保留札者

武部 (山風) 乎 安良之止以不良武

〔C〕(文屋康秀)

不久可良仁 阿支乃(草木)能 志保留札者

武遍 (山) 可世越 阿良之止以不良无

武遍 (山) 可世越 阿良之止以不良无

〔D〕(文屋康秀)

(吹) 可良尔 (秋) 乃(草木)乃 志保留連八

武部 (山風) 越阿良之止以不良无

【古注釈】

一、「しほる」の意味

○『経厚抄』

草木のしほるとは、野分の風には皆草木のしほれ行也。

○『雑談』

秋の風はちからありて吹からに草木もいたむ也。

○『三奥抄』

草木のしほる、とは、木葉はおち、り草は色かはりおれふすさまを云。

○『龍吟明訣抄』

草木のしほるゝとは、木葉は落ちり草は色かはりかれふすさまをいふとなり。

○『宇比麻奈備』

秋の末にあらしの吹たてば、かならず草木のしほみそこなはるゝ、さらに、山風の名を荒^{アラ}しといへるぞ、げにうべなる事にざりけると也。

二、「山風」の捉え方

○『新抄』

山かぜがふくとそのまゝ、秋の草木がしほるゝをみれば、成ほどがてんが行^イた。さように本草をあらすものゆゑ世上であらしといふならんと也。

○『色紙和歌』

山より吹風つねよりはげしくて草木かれぬれば、あらし風とは道りよ、といふ心也。

○『師説抄』

草木は其時節にてしほるれども、そのしほるゝ折ふし山風が荒くてふきしほらすると云は尤也。

○『三奥抄』

あらし物の過る跡はものゝやぶれそこなはるゝならひなるに、今山風のふきたる野をみれば、草木ことごとくしほるればあらしとはむべもいひたり、といふ心なり。

○『改観抄』

今山風の吹たる野を見れば、草木ことごとくしをるれば、あらしと

はげにもいはれたりといふ心なり。

○『異見』

改観に、草木のしをるゝとは、木葉は落ちり、草は色かはり、をれふすさまをいふ云々。あらしものゝ過る跡は物の破れそこなはるゝならひなるに、今山風の吹たる野を見れば、草木ことごとくしをるればあらしとはげにもいはれたりと云意也、といへるは非也。こは、其跡のそこなはれたるを見て、あらしものと嘆じたるにあらず。今吹あらすけしきをさせり。

【考察】

『古今和歌集』巻第五、秋歌下、二四九番に「これさだのみこの家の歌合のうた」という詞書で載る歌である。

「A」では、画面右側に左袖を翻す男性の立ち姿が描かれる。作者の文屋康秀であろう。山を背景として、その手前、画面右方には木々が、また左方には細長い葉の草叢がある。男性の袖は、画面右方から吹いてくる強い風に吹き返されているように見える。木々の枝振りも、画面右から左へ若干曲がっているのは、強風に撓るさまを表したもののか。

また「B」は、画面左上から斜め下方に線を描き、その上に緑や茶の点が複数描かれる。これは、強風に吹き付けられて散る木の葉を表すものであろう。

「C」の図柄の中ではとくに、紫色や白みがかった小さな花と、丸みをもった葉の萩が目立つ。いわゆる秋の七草のひとつである。また、細長い葉は薄であろうか。秋の野の情景を象徴的に表そうとしているようである。画面左下から右上方へ向かって、草が画面いっぱいに生えてい

る構図は、いかにも強風に煽られて曲がったように見える。

〔D〕では、薄のような細長い草を、青みがかった葉と茶色の葉を交ぜて描く。次第に枯れていく野の情景を表現したと見られる。細長い草が靡いた状態なのは、画面左方から右方へ強い風が吹いたことによるものと解することができようか。

「しほる」の意味については、『経厚抄』をはじめとして、「(草木の)しほれ行」というように、「しほる」という語をそのまま用いて説明している古注釈もあるが、「草木もいたむ」(雑談)、「草木のしほみそこなはる、」(宇比麻奈備)、さらには、「木葉はおち、り草は色かはりおれ(かれ) ふすさま」(三奥抄・龍吟明訣抄)というように、より具体的な情景を提示するものもある。これは、「〔B〕」の散る落葉、あるいは「〔B〕」の緑(青)や茶色の葉を交じえた描き方に符合しよう。

また、「山風」について、草木を荒らすもの(新抄)、また、山風がいつもより激しく吹いて草木を枯らす(色紙和歌)といったように、吹く山風と枯れる草木を因果として説明するが、『師説抄』はさらに、草木がしおれる時節と山風が荒く吹く時節が一致するという点に言及している。

なお、山風が吹き荒れた野を見ると草木がすべてしおれていた(三奥抄・改観抄)と解して、嵐の後の情景と見る古注釈もあるが、『異見』は、「今吹あらずけしきをさせり」と、嵐の情景を眼前のものとする。これは、とくに「〔A〕」「〔B〕」のかるたの図柄に表現された、激しい「山風」が今まさに吹いている情景に通じる解釈であろう。

一二三番

〔A〕



大江千里
月みれば
ちゝに
ものこそ
かなし
けれ

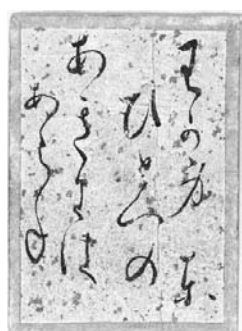


わかみ
ひとつの
あきには
あらねと

〔B〕

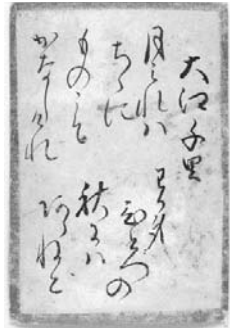


大江千里
月みれば
千々に
ものこそ
かなしけれ

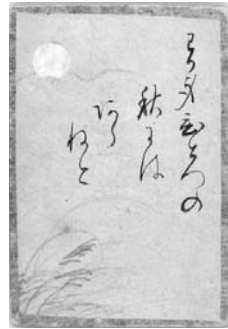


わか身
ひとつの
あきには
あらね

〔C〕



大江千里
月みれば わか身
ち、に ひとつの
ものこそ 秋には
かなしけれ あらねと

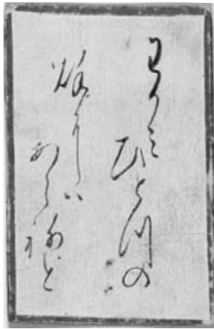


わか身ひとつの
秋には
あら
ねと

〔D〕



大江千里
月見れば
千々にも
かなし
こそ
けれ



わかみ
ひとつの
秋には
あらねと

【字母】

〔A〕（大江千里）

（月）三礼八知（、）尔毛乃己曾可奈之計連
王可三比止川乃安幾仁八阿良年止

〔B〕（大江千里）

（月）三礼八（千々）仁毛乃己曾可那之介礼
王可（身）比止川乃安幾尔波安良年東無

〔C〕（大江千里）

（月）三礼八知（、）仁毛乃己曾加奈之介礼
王可（身）飛止川乃（秋）尔八阿良祢止
王可（身）飛止川乃（秋）尔波阿良祢止

〔D〕（大江千里）

（月見）礼八（千々）尔毛乃己曾可那之介礼
王可三比止川乃（秋）耳八安良祢止

【古注釈】

一、心に憂いがあるから物悲しくなる

○『古注』

我身に愁の有によりて、月をみるにもいたく物のかなしきを、歎て
よめる、秋のきたる事は、天下にきたる秋にて、万人のうへにも秋
はかなしかるべきに、愁のある我身は別して月をみるにも物のかな
しき、と詠じたる歌也。

○『色紙和歌』

身に物おもひのあるときは、春のはなざかりといふもかなしきのみ

なるに、いはんやさびしき秋の月を詠め千々万々に物かなしくて、
(……以下略)。

二、月が人の心に物悲しさを起こさせる

○『経厚抄』

千々に物こそとは、心に思事の月に催され行儘に、次第に心のか
しく成也。(……中略……)。世上の秋と思なせども身に限るやうに
悲もの極りぬと云歌なり。

○『宗祇抄』

猶月は陰の気なれば、ながむるにも心すみ哀す、むる物也。されば
千々に物こそ悲しけれといへり。

○『幽斎抄』

月は陰の気なる故に、うちながむるに心もすみあはれもす、むもの
也。

○『天理本聞書』

月は天然陰氣の物にて、人の心をすまして悲歎の心を告る也。

○『三奥抄』

月は都て夜陰の物なれば、うちみるよりかなしき物なるに、時亦秋
にしてながむればかなしきことのいよいよ数しらぬまでに覚ゆるな
り。

三、漢詩の翻案とする説

○『後陽成抄』

朗詠に大底四時心惣苦、就中腸断是秋天といへり。或又、燕子楼中
霜月夜、秋来唯為一人長といへる心もあり。

○『改観抄』

千里は儒家にて、文集ノ中ノ秀句を題としてよまれたる歌おほし。
然れば此歌も、燕子楼ノ中霜月ノ夜秋来唯為 二二一人 一ノ長シ
と作れる詩を翻案してよまれたるにや。月をながむれば陰氣にひか
れてかずかずに物こそ悲しけれ。

○『宇比麻奈備』

或説に、白居易が秋興詩に秋来只一人為^マ長^マてふを引り。大江氏は
儒家にて、ことに其ころ白氏が文をめづれば、さも有なん。

○『異見』

改観に、千里は儒家にて、文集中の秀句を題としてよまれたる歌多
し。しかれば、此歌も、燕子楼中霜月ノ夜、秋来只為^マ二二一人^マノ
長^シ、といふを、翻案してよまれたるにや、といへり。

【考察】

『古今和歌集』巻第四、秋歌上、一九三番に「これさだのみこの家の
歌合によめる」という詞書で載る歌である。

「A」の札には、右下方に花が三輪ほど見える。桔梗であろう。そして、
画面左側に邸が描かれ、烏帽子を被った男性が軒近くに座り、外を眺め
ている。作者の大江千里と見られる。右上方の画面には、山の稜線より
高い雲から月が出ている。作者が邸内から月を眺めている構図である。

「B」には、大中小の広葉が一枚ずつ、計三枚描かれる。葛の葉と見
られよう。緑色の葉だが、部分的に茶色であるのは、葉が枯れかかる秋
という季節を表すと見られる。このうち大きな葉の先には、虫喰いのよ
うな小さな穴もある。月が描かれていないのは、この「B」のかかるたの
みである。

「C」のかるたは、札の左上方に、薄い雲の上に出た月が、また左下方には薄を描く。緑色のほか、茶色で彩ることで、枯れかけた秋の野の情景を表しているよう。

そして「D」は、左上方に薄い雲から出た月のみを描く。これは、『百人一首』二一番、素性法師の札に酷似する図柄であるが、当該歌の月のほうが、やや雲に隠れている。

これら四種のかるたのうち、「A」「C」「D」には、共通して「月」が描かれる。なかでも「D」は、先に触れたように、月のみを描いている点が目に付く。古注釈においては、物悲しくなるのは、そもそも人の心に憂いがあるからなのだという説（古注・色紙和歌）の一方で、人の心に物悲しさを起こさせるのが「月」であるという説（経厚抄・宗祇抄・幽斎抄・天理本聞書・三奥抄）があるが、「D」は、「月」に着眼した後者の指摘に添う景物を選んだものと捉えられよう。なお、後者の古注釈のうち、『経厚抄』を除くものには、月に「陰」の気があるとも指摘している。

また、「A」「B」「C」には、秋の七草のひとつである桔梗・葛・薄がそれぞれ描かれ、秋という季節を象徴的に示す。とくに「B」が、「月」に着眼せず、葛の葉のみを描く点に留意されるが、それは、当該歌を「秋興詩」の翻案とする捉え方（後陽成抄・改観抄・宇比麻奈備・異見）とも軌を一にする視点であろう。

二四番

「A」

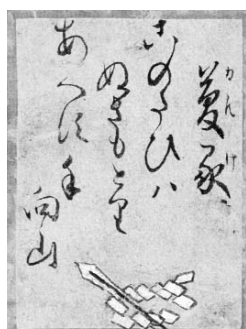


菅家
このたひは
ぬさも
とりあへず
たむけ山

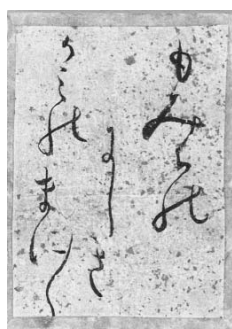


もみちの
にしき
かみの
まにく

「B」

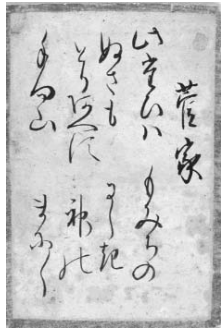


菅家
このたひは
ぬさもと
りあへず手
向山



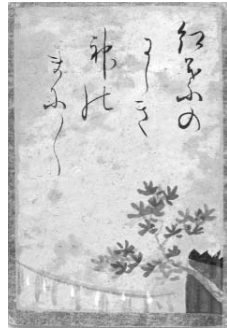
もみちの
にし
き
かみのまにく

[C]



菅家

此たひは もみちの
ぬさも にしき
とりあへず 神の
手向山 まにく



紅葉の
にしき
神の
まにく

[D]



菅家

此度は
ぬさも
とり
あへず
手向山



紅葉の

にしき
神の
まにく

【字母】

[A] (菅家)

古乃多比八 奴左毛止利安_下春 太武計 (山)
毛美知能尔之幾 可三乃末仁_下

[B] (菅家)

古乃多比八奴左毛止里安_下須 (手向山)
毛三知能尔之幾可三能末仁_下

[C] (菅家)

(此) 堂比八奴左毛止利阿_下須 (手向山)
毛美知乃尔之起 (神) 能末尔_下

(紅葉) 乃尔之幾 (神) 能末尔_下

[D] (菅家)

(此度) 盤奴左毛止利安_下須 (手向山)
(紅葉) 乃丹之支 (神) 乃末尔_下

【古注釈】

一、「幣」の説明

○『後陽成抄』

ぬさとは、或秘抄に金錢散米又いろいろのきぬ布の類のきれぎれな
どを、神に手向くるをいふなり。

二、「幣も取りあへず」の解釈 (一) 私的な幣は用意してこなかった

○『経厚抄』

ぬさもとりあへずとは幸紅葉の時分なれば、其麻を袂に任てちらさ
ん程にと云心なり。裏の義には、寛平法皇の供奉の時なれば、私の

切麻などは取も不調とあるが返りて礼を顕さる、処なり。

○『天理本聞書』

心は、旅に立物は道祖神を祭てゆけども、此度はぬさと、のふるにおよばず。君の御供なれば、是をとがめあるべからず。手向山の紅葉のにしきを御神の心のまゝに請給ふと云心なり。

○『幽斎抄』

供奉の時なれば私をかへり見ぬ義にて、神に幣帛をもさゝげぬと也。されども紅葉の綿をそのまゝ手向ると也。

○『三奥抄』

幣もとりあへずとは、都を出し時幣をもとりあへず出し、これは君の御供を専と思ひて私の旅行に心なりし故也。しかるを幸にして手向の山に至れるに、亦幸にして山の錦さかりなれば、こゝにて是を幣とすべし。一山の錦いかほど幣に切用るとも余り有べければ、（……以下略）。

○『改観抄』

幣も取あへずとは、こゝにて句を切と手向山とつゞくるとの両義あるべし。句を切心ならば、幣は誠のぬさにて、都を出し時幣をも取あへず出し。それは君の御供を詮と思ひて私の旅行に心なりし故なり。しかるを手向山に至れるにさいはひにして山の錦さかりなれば、是を幣とすべし。（……中略……）。又手向山とつゞくる心ならば、取あへず紅葉を幣に手向たてまつると、ぬさといふにやがて紅葉の心ありて、手向山の名にいひかくるなり。其外はかはる事なし。

○『宇比麻奈備』

此度は院の扨オホントセ従なれば、私のぬさはえとるに堪タヘず、此山の紅葉のに

しきはよきぬさしろなれば、（……以下略）。

三、「幣も取りあへず」の解釈（二）急な御幸で幣を用意できなかった

○『新抄』

此度は院の御幸の供奉にてあはたゞしくて、幣をも用意せざりし故、此手向山の紅葉がにしきの様なれば、これをぬさとしてたむくるほどに（……以下略）。

○『米沢抄』

心は、行幸のさはがしまゝにぬさも取あへず、紅葉をたてまつると也。

○『色紙和歌』

みかどの御供にていそぎ出たちぬに、ぬさもとり合べき隙もなくしてとらず、山のもみぢをそのまゝぬさと手向ける也。

四、「幣も取りあへず」の解釈（二）（二）の否定

○『異見』

こは、さばかりの紅葉の中に、我ぬさばかりの錦をばいかに手向まゐらせんと、めでの余りを歌とよみ出給へるのみにこそあれ。まことは、おほやけ私の幣物、かたのごとく取まかなひ給はざらんや。歌のおもてにつきて、此たびはさてやみ給へりとおもへるは、いふにたらぬ事也。

【考察】

『古今和歌集』巻第九、羈旅歌、四二〇番に「朱雀院のならにおはしましたりける時にたむけ山にてよみける」という詞書で載る歌である。

「A」のかるたには、二人の男性が描かれる。向かつて左側の垂纓冠

を被った衣冠姿の男性が作者の菅家、菅原道真であろう。赤く彩色された鳥居の方を向いて跪き、笏しやくを持っている。その後ろで同様に跪いているのは、傘持ち（貴人の行列に長柄の傘を持って供をする者）であろう。また、鳥居の向こうには、画面左から右へ、曲がりくねった川と見られる水流があり、画面中央には朱で彩色された紅葉の木が描かれる。鳥居の左側や紅葉の木の根元、画面左上や右上は、薄い緑色である。当該歌の「手向山」の所在地はにわかには決し難く、従って地形も明らかにし難いが、その地の情景を想像して描いたものであろう。

「B」に描かれるのは幣帛へいはく、すなわち幣そのものである。色は白い。当該歌は、幣の代わりに紅葉の錦を手向けるという趣向であるが、幣を色とりどりに彩色するようなことはしていない。『後陽成抄』が、「或秘抄」の説として、「幣」を「いろいろのきぬ布の類のきれぎれなど」と説明するのは、一線を画すであろう。

また「C」は、画面右側に朱塗りの玉垣、その横に注連縄しめなわを描き、そこが神を祭る場であることを示す。玉垣の手前、画面右下からは、紅葉の枝が伸びている。「D」は赤い点で紅葉を表し、山の遠景を描く。「手向山」を麓から眺めた構図である。

古注釈では、「幣も取りあへず」の解釈が大きくふたつに分かれる。宇多法皇に供奉するという公的な機会なので、私的な幣は用意してこなかったとする説には、『経厚抄』『天理本間書』『幽斎抄』『三奥抄』『改観抄』『宇比麻奈備』がある。とくに『改観抄』は、「幣も取りあへず」で句を切るか、それとも続けるかで「両義あるべし」と述べるものの、「君の御供」であって「私の旅行」ではないことに着目している。一方、急な御幸であったために幣を用意できなかったとする説には、『新抄』『米沢

抄』『色紙和歌』がある。これらの説を否定するのが『異見』で、「めでの余りを歌とよみ出給へるのみ」という解釈には首肯されよう。「A」「B」「C」のかるたが、描くものこそ差異があるが、「神」への「手向け」という点を図柄に取り入れているのに対し、「手向山」全山の紅葉を描く「D」には、『異見』のこの主張とも共通する解釈の視点が看取される。

二五番

[A]

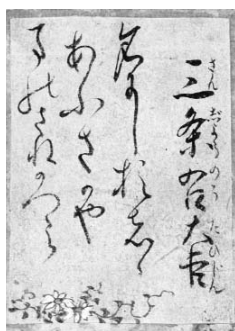


三條右大臣
さねかつら
名にし
おは、
山の あふさか



くる
よしも
かな
人に
しら
れて

[B]

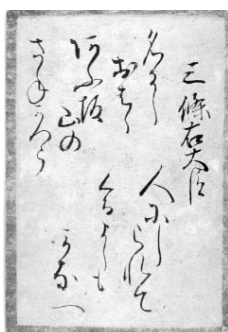


三條右大臣
名にしおは、
あふさかや
まのさねかつら

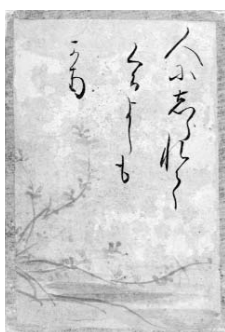


ひとに
しられて
くるよし
もかな

[C]

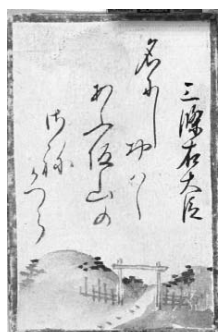


三條右大臣
名にし 人にし
おは、 られて
あふ阪 くるよしも
山の かな
さねかつら



人にしられて
くるよしも
かな

[D]



三條右大臣
名にし
おは、
あふ阪山の
さね
かつら



人に
しられて
くるよし
もかな

【字母】

〔A〕（三条右大臣）

（名）丹之於八、安不左可（山）乃左年可川良
（人）耳志良連天久累与之毛可那

〔B〕（三条右大臣）

（名）尔之於者、安不左可也万能左祢可川良
飛止仁之良礼天久類与之母可那

〔C〕（三条右大臣）

（名）尔之於者、阿不（阪山）乃左年可川良
（人）尔之良礼天久留与之毛可奈

（人）尔志良礼天久留与之毛可南

〔D〕（三条右大臣）

（名）丹之於八、安不（阪山）乃佐祢可川良
（人）耳志良礼天久留与之毛可那

【古注釈】

一、「人にしられて」の「て」の清濁

○『宗祇抄』

て文字、清濁両儀也。

○『天理本聞書』

しられてのてのにごりてよむなり。

○『幽斎抄』

人にしられでて文字を清説、当流不用之。

○『師説抄』

口となふる時は清て、心には濁るなり。

○『雑談』

一説に、人にしられてとすみて用る説もありといふ。今まではしのびたれ共、おもひあまりにうちふて、人にしられてなりともくるよしもがな、と云。かのかはりたる事いはんとの説なり。

○『三奥抄』

人にしられてを清てよむといふ説わろし。

二、「くるよしもがな」の解釈（一）男性が女性のもとに「来る」

○『経厚抄』

なにしおはゞ相坂と云に、いひおほせてあふと云山に生るかづらならばと云心也。（……中略……）かづらは木の葉の下草根などを蔓ゆく物なれば、其に寄て人しれずくるよしもがなと云也。

○『新抄』

逢坂山のさねかづらといふ名のとほりで、あふて一所にねるといふ中ならば、何とぞして人にしられぬやうに来るしかたもがなあれかしと也。

○『宗祇抄』

さねかづらは、是を引とるに、茂みなどにある物なればいづくよりくるともみえぬ物なれば、其ごとく思人世にしられずしてくるよしもがなといへる也。

○『米沢抄』

此かづらは、草の下より生るゆへに根をしる事なし。わがかよひぢをしられずしてかゝらばやとよめり。

○『天理本聞書』

此かづらは、一筋切てくりよすれば、人にしられぬ方より遙々ひかれくる也。夫をたとへたり。されば、くるいはむため也。

三、「くるよしもがな」の解釈（二）男性が女性のもとから「帰る」

○『字比麻奈備』

女のもとに行て相寝^{アヒネ}て、しかも人にはしられずしてかへり来^{ナシ}ん為がたもあれかしといふ也。

四、「くるよしもがな」の解釈（三）男性が女性に「来る」ことを誘う

○『色紙和歌』

さねかづらは、くり出す草なれば、くるといはんまくら言葉なり。（……中略……）。扱又逢坂山に生たるかづらなれば、けいぶつ引出したる也。（……中略……）わがおもふ人、われにあはんため人にしられずしてくるよしもがな、と願たる也。

○『三奥抄』

あふと云名のまことならば、人しれずしてくるよしもがなといふなり。かづらをとる時は、もとを切たちて是をたぐるに、いづくよりくるともしらず末はことごとくわが方にくりよせらる、そのごとくにあらばやとよめる心也。

○『改観抄』

女の男による事かづらの物にかゝりてはふに似たれば、おほく女にたとふ。しげりてはひあへば、それを女の習、かならず男にあふ物なるによせて、逢坂山のさねかづらといへり。（……中略……）人しれずして我心に任するよしもがなといふ心を、よそふる物の上のみにひてあらはせり。

○『龍吟明訣抄』

あふ坂山のさねかづらは人のしるまじきと思ひたるに、皆人しりてとりにくる其ごとく、名有程の美人は何程深窓^{シツ}にかくれてもかくれなし、聞及びたる故かくはしめず、と女のもとへ初恋の歌なり。龍吟秘抄御説に、くるよしもがなとあるによりてなびけかしといふ心なりと云々。芝山殿云、家の説に初恋の歌にあらず。互にいひかはしたるうへしのお一段になりて、宮中の女中ゆへ此方よりは参りがたし、手まへえ忍びてもがなとの歌のよしなり。

○『異見』

譬へば、女のもとへさる所のさね葛を贈りたるなどやうの事ならでは、一首さらにことわりをなさず。（……中略……）又、くるよしもがなとあるを、帰りくるよしもと見たるは、いと物遠し。こは、男こそは通ふべけれ、女は来べきものならずと思へるよりの謬なるべし。

【考察】

『後撰和歌集』巻第十一、恋三、七〇〇番に「女につかはしける」という詞書で載る歌である。

「A」のかるたには、画面左側にふたりの人物が描かれる。向かって右側の男性は衣冠姿で垂纓冠を被り、女性の方を振り向いている。作者の三条右大臣、藤原定方であろう。女性はいづみき加減に定方の方を向き、右手で定方の袖を引いているように見える。画面右側には、真葛の茎が曲がりくねり、所々に葉を付けている。定方の左手はその茎を掴んでいるようである。画面上部には山々が連なり、緑に彩色されている。男女が山中にいる図柄である。

一方「B」は、二輪の白い花を付けた緑の真葛が描かれる。真葛の花が咲くのは七、八月頃とされる。その時期の真葛のさまを描写したものであるう。

「C」では、真葛の茎が、画面左下から複数本、曲線を描きながら伸びる。茎には緑の葉が付いている。その茎の間を透かし見た奥にある、彩色された薄茶色と水色の部分は、山と水辺とを表しているようである。山は逢坂山であろうが、水辺は、逢坂の関のほとりを流れる「関水」を表すか。

「D」の図柄は、逢坂山にある「逢坂の関」を、左右の柵や、関を通る坂道とともに描く。真葛を描かない点で留意される。逢坂の関は、『百人一首』において、一〇番の蟬丸歌に詠まれており、札には、当該歌と同様の図柄と筆致で「逢坂の関」が描かれている。ただし、蟬丸の札は、逢坂の関を当該歌の札よりも坂道の下方から見上げる構図である。

10番 蟬丸



古注釈においては、「人にしられて」の「て」の清濁について明言しているものがある。『宗祇抄』は「清濁両儀」を認め、『師説抄』は「口」となる時は清「心には濁る」という説を唱えるが、『天理本聞書』『幽斎抄』『雑談』『三奥抄』のように「濁」を可、あるいは「清」を不可とするものが多い。「人にしられてなりともくるよしもがな」という解釈

は、『雑談』が否定するとおり、やはり無理であろう。他の古注釈においても、「人にしられで」という本文で解釈しようとしていることがわかる。

「くるよしもがな」の「くる」の解釈について、男性が女性のもとに「来る」意と解するものには、『経厚抄』『新抄』『宗祇抄』『米沢抄』『天理本聞書』がある。多くは、「かづらは木の葉の下草根などを蔓ゆく物」（経厚抄）、引き取ると「いづくよりくるともみえぬ物」（宗祇抄）、「根をしる事なし」（米沢抄）という真葛という植物の特徴に言及し、女性のもとに通う男性の行動に重ねて解釈している。また、『天理本聞書』は、真葛は「夫」のたとえとする。なお、人に知られぬよう女性のもとから帰る方策があればいいという『字比麻奈備』の説もあるが、ごく少数であり、『異見』はこれを否定している。

一方、『色紙和歌』は、「わがおもふ人、われにあはんため人にしられずしてくるよしもがな」と、男性が女性に対し逢瀬を誘った歌と解している。また、『三奥抄』が、前述の真葛の特徴に言及した上で、「末はことごとくわが方にくりよせらる、そのごとくにあらばや」と述べるのも、男性から女性への誘いと見ている。また、『改観抄』は、葛を「女」のたとえとして、男性が「我心に任する」ことを女性に願った歌とする。さらに、『龍吟明訣抄』所載「龍吟秘抄御説」も、女性に対して「なびけかしといふ心」と述べ、「芝山殿」の語る「家の説」ではさらに、「宮中の女中」のもとへは通い難いので、忍んで来てほしいと述べられている。同様に『異見』も、女性に来てほしいと望む歌と見る。「A」のかるたに描かれた、真葛の茎を掴む男性と、その男性の袖を引く女性の姿は、誘いのまま男性に心を寄せ、女性が忍んで来た場面を想像させる。

なお、『異見』には、女性のもとに真葛を贈るといった状況でない、詠歌の契機が想定しにくい歌だという指摘がある。「B」のかるたに花の咲いた真葛が描かれたのも、単に画面を彩りたかったのかもしれないが、あるいは真葛を女性への贈り物と想定した上での図柄か。

二六番

〔A〕



貞信公
おくら山
みねの
もみち
は
心あらは

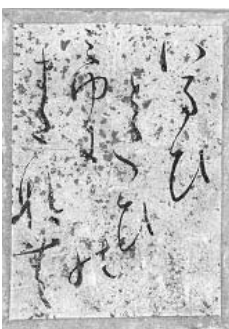


いま
ひとたひの
みゆき
また
なん

〔B〕

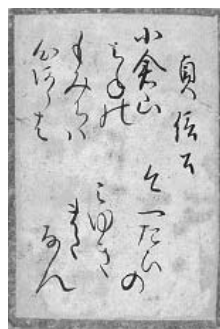


をくらやま
みねの
貞信公
紅葉葉
こゝろあらは



いまひ
とたひ
みゆきの
またなむ

〔C〕



貞信公
小倉山 今一たひの
みねの みゆき
もみちは また
心あらは なん

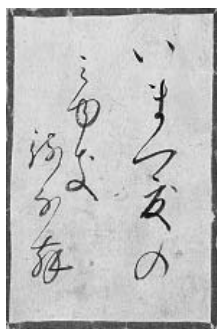


いま
ひと
たひの
御幸また
なん

〔D〕



貞信公
小倉山
峯の
紅葉、
こゝろ
あらは



いま一度の
みゆき
待なむ

【字母】

〔A〕（貞信公）

於久良（山） 三年能毛美知者（心） 安良八
以万比止多飛能 三由幾末多奈无

〔B〕（貞信公）

遠久良也末 三年乃（紅葉葉） 己（ゝ） 呂安良八
以万比止多比能 三由支末多那無

〔C〕（貞信公）

（小倉山） 三年能毛美知八（心） 阿良者
（今一） 太比乃 三由幾末多奈无
（今） 飛止太比乃（御幸） 満多奈无

〔D〕（貞信公）

（小倉山）（峯）乃（紅葉、） 己（ゝ） 路安良八
以末（一度）乃 三由支（待） 奈舞

【古注釈】

一、醍醐天皇の行幸を待てという紅葉に対する呼びかけ

○『経厚抄』

一首の心、只今寛平法皇の臨幸をば待得たり。此後延喜の行幸を待奉る迄散^{オラス}なと紅葉に云懸たるが此歌の感也。

○『新抄』

峯のみぢよ（……中略……） 今院の御幸ありて行幸もありぬべき所也と仰られたれば、（……中略……） 今一度みゆきのあるを待あはせてちらぬやうにせよと也。

○『宗祇抄』

心は、行幸の事を我身にかけずして、紅葉におほせいへる事尤珍敷にや。

○『幽斎抄』

歌の心は、御幸はすでに有、とても事にちらずして、行幸をも待つけよと紅葉に対していへり。

○『師説抄』

此紅葉時節をしりてもみぢし、散べき時節をしりてちるからは、紅葉も心があるなり。その心あらば、ちらずにゐて行幸を待てと也。

○『後水尾抄』

三光院云、（……中略……）。歌がらの殊勝なる事は勿論なれども、此歌も小倉也、されば御幸をも申べき物をとの下心也。山も同じ紅葉も同じ山の紅葉にて有程に、わが身数ならば行幸をも可待物をとの心也。さながら貞信公に通すべき歟。

○『三奥抄』

行幸も有ぬべき所とおほせ給ふ、其あたり山川の躰勢おもしろき中に小倉山の紅葉にめで、のたまふ故、其心をえてよめるなり。唯今のおほせごとうけたまはりてまかりかへらば、其よし当帝へ奏聞すべし。さあらば、さだめて主上行幸有べし。其折までけふの紅葉ちりうせずして待奉れといふ心也。草木は非情といへども、猶其玉しゐるべければかくいひきかせらるゝなり。

○『宇比麻奈備』

是は上皇の勅ありて、今上の行幸にもあひ奉りなば、紅葉にとりてかたじけなき事ぞ、今しばしちらで、行幸を待つけ奉れよてふ事

を、有のまにまにいひてよく歌となし給へり。

○『燈』

小倉山のもみぢの、今上行幸したまはむ日までちらではありがたかるべきが、いとわびしさのあまりによませ給へるなり。

○『峯のかけはし』

小倉山ノ峯ノ紅葉ヨ、（……中略……）其方心ガアルナラバモウ一度ノ行幸ヲチラズニ待チテ居ヨ。上皇バカリカ今上ノ行幸ニモ逢ト云コトハ有難イコトヂヤゾヨ。

○『異見』

改観に、（……中略……）取置き小倉山の紅葉にめで、のたまふ故、其心をえてよみ給へり。只今の仰ごとうけ給りて、まかり帰らば其よし主上に奏聞すべし。さあらば、定めて行幸あるべし。其折まで、けふの紅葉散うせずして待奉れといふ心也、といへり。

○『一夕話』

歌の心は、この小倉山の峰の紅葉が心あるものにてあらば、（……中略……）この儘色も変らず散りもせずして今一度の行幸を待ち奉りたらば、よからんといふ心なり。

二、宇多法皇の再度の御幸を待てという紅葉に対する呼びかけ

○『色紙和歌』

心は、さやうに御門の御しやうくはんならば、もみぢも心してちらずして、かさねての御幸をまちたてまつれとの心なり。

○『後陽成抄』

行幸を待つことまでに過分なれば、いく度も御幸をちらでまてかした、紅葉に心中をゆづりていへること、尤珍重にや。

○『龍吟明訣抄』

冷泉為家卿鈔云、(……中略……)。此歌の心は、峯の紅葉、といふ
たるに心あり。峯の紅葉はやくもようすものなり、又来年もはや
く御幸を待やうに一段もみぢせよとの事にて、実は法皇の御徳を称
美し奉り、人間はいふにおよばず草木まで一度御幸なされたる御徳
にあへば、又も御幸を待やうにしたふといふ心也。

【考察】

『拾遺和歌集』巻第十七、雑秋、一一二八番に「亭子院大井河に御幸
ありて、行幸もありぬべき所なりとおほせたまふに、ことのよしそうせ
んと申して」という詞書で載る歌である。

「A」の挿絵の中央には、二人の人物が描かれる。左側の人物は亭子
院(宇多法皇)、右側の垂纓冠を被った衣冠姿の人物は作者の貞信公(藤
原忠平)であろう。画面左下の御所車は、「みゆき(御幸)」であること
を示すものである。また、画面右上方には山肌に紅葉の葉が比較的はつ
きりと描かれる。「小倉山」の「峰の紅葉葉」を示す。「B」では、重な
る山と山の向こうに、ひときわ太い木の幹と、広がる枝に、多くの赤い
点で紅葉した葉を描く。小倉山の紅葉の遠景である。同様に、「D」でも、
山間に描かれる赤い点は、紅葉であろう。山の麓からの眺めである。

さて、「C」であるが、御所車は「A」のかると同様であるけれど
も、その上方に描かれるのは紅葉ではなく、桜と見られる。いま、かる
た「C」において、他の札に描かれる桜を、当該歌の札の挿絵とともに
挙げておく。

26番 貞信公



33番 紀友則



66番 大僧正行尊



「C」のかるとの桜の描き方に類型があることは一目瞭然である。当
該歌の札の紅葉を描くべき部分に桜が描かれたのは、製作時の図柄の指
示が不明瞭だったためか。あるいは、絵を描く際の単純な手違いだった
かもしれない。

先に少しく触れたとおり、御所車を描く「A」「C」のかるとは、『拾
遺集』の詞書に拠って、御幸であることを示していよう。とくに「A」
のかるとは、一貫して挿絵に人物を描くが、宇多法皇と時平を中心に据
えながら、山の紅葉の葉の輪郭をはつきりと描く。これは、「峯の紅葉
葉」(峯の紅葉の葉)という解釈を念頭に置いたものか。なお、和歌本
文の表記として、同様の解釈が読み取れるものは、「B」(紅葉葉)、「D」
(紅葉、)である一方、「C」は「は」の字母に「八」を用いており、「は」
を助詞と認めて「紅葉は」と解釈していた可能性があろう。その点、「A」
の表記では、にわかに判断しがたい。

以上、四種のかるとの図柄を比較してみると、御所車を描く「A」「C」
と、山間の紅葉を遠景として描く「B」「D」に大別できそうである。

なお、古注釈書の多くは、醍醐天皇の行幸まで散らずに待てと紅葉に
呼びかけたと説明する。その一方で、宇多法皇の再度の御幸を待てと解

するものとして、『色紙和歌』『後陽成抄』『龍吟明訣抄』が挙げられよう。中でも、『龍吟明訣抄』が、「冷泉為家卿鈔云」として、「草木までも」翌年の「御幸」を待つように慕うという「法皇の御徳」の「称美」と述べるのは異色である。

附記

本稿は、同志社大学文化情報学研究科における二〇二〇年度秋学期の授業「日本古典文学情報特論2」において採り上げた内容の一部である。小原菜々子（一七～一九番）・関あかり（二〇～二二番）・薛堰之（二三～二五番）が、それぞれの担当歌についてレポートを執筆した。これに二六番を加え、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二二年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号 20K12565、110110～110111年度）の一環として、さらに検討を加えた。